

漢詩を味わう

第84回

少年老い易く学成り難し
一寸の光陰軽んずべからず

偶成 朱熹（観中中諦）

少年易老学難成

少年老い易く学成り難し

一寸光陰不可輕

一寸の光陰軽んずべからず

未覚池塘春草夢

未だ覚めず池塘春草の夢

階前梧葉已秋聲

階前の梧葉已に秋聲

月日のたつのは早く、若いと思つていてもすぐに年老いてしまう。それに反して学問の研究はなかなか成し遂げがたい。

年月は移ろいやすいので、わずかな時間も軽んじてはならない。ちようどそれは、池の堤で春の草が萌えるころ楽しくまどろんだ夢がまだ覚めないうちに、階段の前の桐の葉にはもう秋の風が忍び寄つてくるようなものだ。

《偶成》 偶然に作られた詩。

《池塘》 池の堤。

《階前》 階段の前。中国の住まいは入り口に二、三段の階段がありその前を指す。

《梧葉》 桐の葉。ほかの木の葉よりも先に葉を落とすことから秋の到来の象徴。

「偶成」とは、ふとした折りに胸の内に湧いたことを纏めた詩ですが、実際には熟慮の制作でも、あえてこのような軽い詩題をつけることもあるようです。

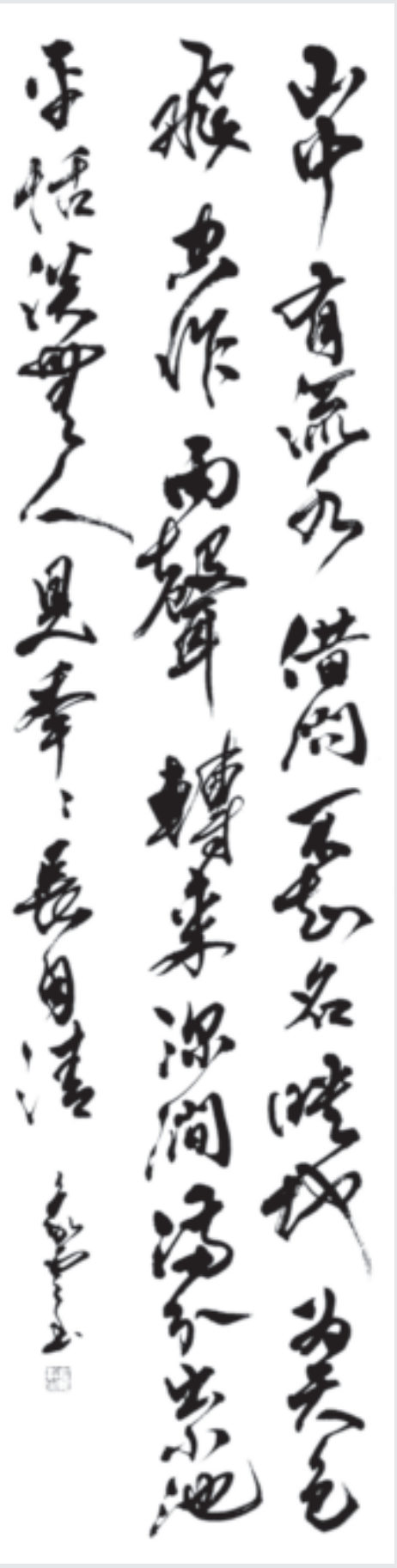
この詩は若者に対して、うかうかするな若いうちはそう長くはないぞ、と学問の勧めのうたとして、多くの人々に親しまれている漢詩です。朱熹（一一三〇～一二〇〇）は朱子と敬称で呼ばれ、中国の思想史において「朱子学」の大成者として有名です。この詩は日本では明治時代に漢文の教科書として登場し、それ以降学問を勧める詩として多くの教科書に採録されています。

しかし最近の研究では、この詩は朱熹の作品ではなく、日本の室町時代の禅僧、観中中諦（一三四二～一四〇六）の詩だとする説が有力になってきました。朱熹の詩文集には見当たらず、近年になって室町前期の五山僧だった観中中諦の詩文集「青嶂集」に掲載されているのが発見されたためです。室町時代は中国に渡った僧侶を中心に五山文学が栄え、また同時に中国との外交のため四六駢儷文や漢詩を作る才能が重視されます。観中中諦はその京都五山相国寺の禅僧で中国にも渡っています。

学問を勧める詩、いわゆる勸学詩は若者に対してお説教的になりがちですが、この詩の優れているところは、後半のたとえが分かり易くて面白いためイヤミがなくお説教に聞こえないところです。また前半の語調がよく覚えやすいこともこの詩の人気を支えているようです。作者がまだ確定はされていませんが、名詩であることに変わりはありません。

参考文献：漢詩の事典（大修館書店）・石川忠久著漢詩の世界（大修館書店）・「少年老い易く学成り難し」詩の作者は観中中諦か（広島大学国語国文学会・朝倉和著）

山中に流水有り 借問すれども名を知らず 地に映えて天色を為し 空に飛んで雨声を作す 転じ来たつて深澗に満ち
分かれ出でて小池平らかなり 恬淡として人の見る無く 年々長に自ずから清し



《大意》 山中に流れる水、名を聞いてみたが誰も知らない。地に照り映えて、青空の如きその色、空中に飛散して雨のような音を立てる。めぐり流れて奥深い谷間にあふれ、分かれ出て小さな池に平らかに満ちる。やすらかに淡泊に見る人も無さままに、年ごとにいつも清らかなその姿。(儲光義詩・山中の流泉)

義理の書を読み 法帖の字を学ぶ



《大意》 物の道理や理論を記してある書を読み、石摺りの手本の文字を習う。

(明熊氏語)

神を凝らす



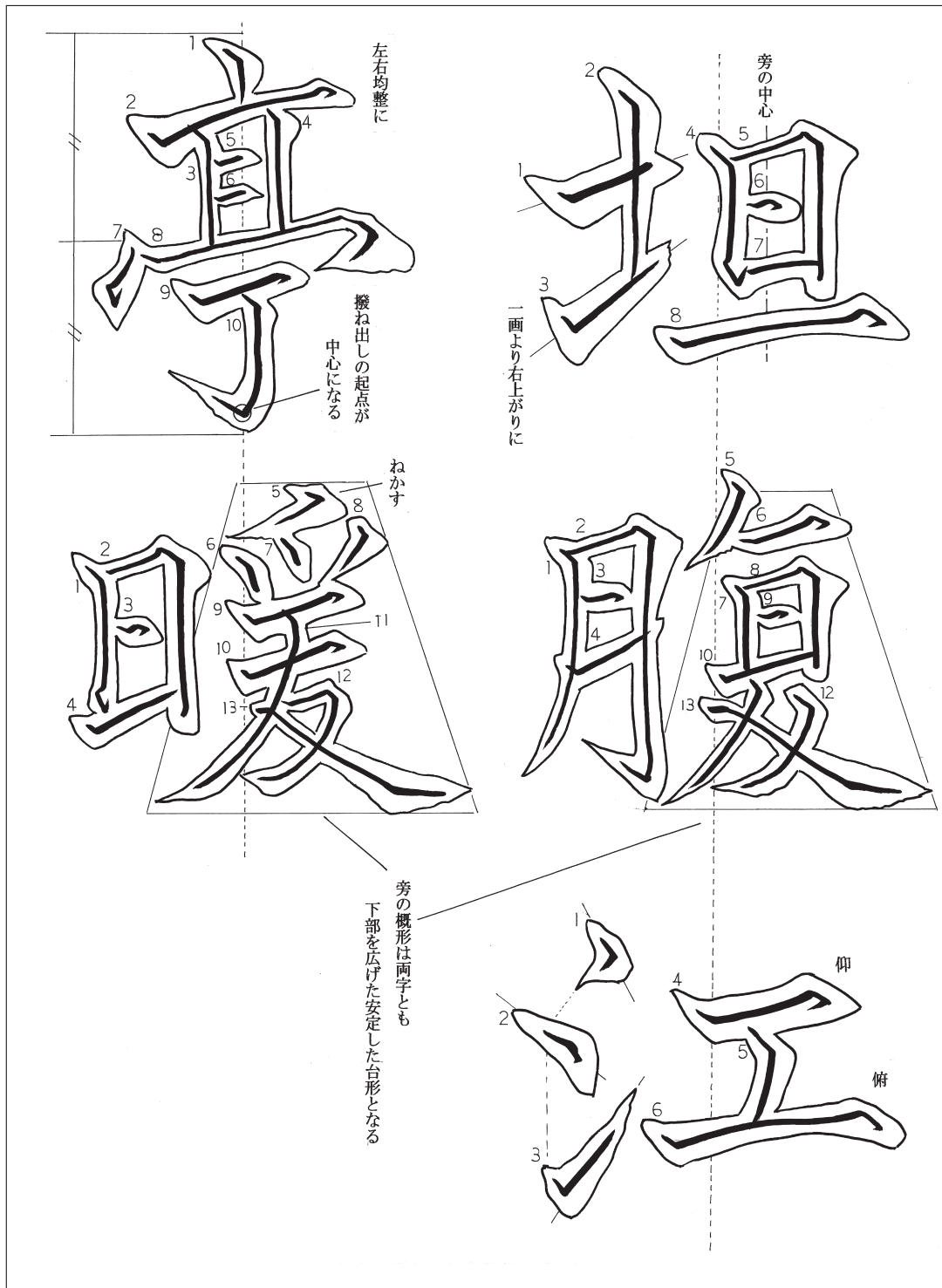
《大意》 精神を凝集させる。(莊子)

読み

坦腹すれば江亭暖かなり
(暖かな日ざしのそそぐ川べりの亭で大の字に寝そべる・杜甫「江亭」詩句)

亭 坦
暖 腹
江

佐藤象雲書



- 一般部規定課題出品について
- ・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。
 - ・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。
 - ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

草書

行書

亭暖
坦腹
江

亭暖
坦腹
江

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

次号課題

隸書

馬跡
門稀
車

亭暖
坦腹
江

門には稀なり車馬の跡

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支 部	富士ひさしうすみ残し	順 位	氏 名
善業かな			

蕪村

和泉溪石先生書

田 談 彼 短 靡 恃 己 長
 田 談 彼 短 靡 恃 己 長
 田 談 彼 短 靡 恃 己 長

佐藤象雲書

音

ボウダンヒタン
ビジコチヨウ

略解

他人の短所を口外してはならない
自分の長所を自慢してはいけない



西は里外に流し(南)……

■ 史晨後碑^{ししんこうひ}

(後漢・西暦一六九年)の臨書 (17)

象雲臨

『西流里外南』

史晨碑は山東省の曲阜、孔子廟内に現存し、礼記碑や曹全碑・孔宙碑などとともに、後漢を代表する典型的な八分隸です。謹厳な姿態で古意に富み品位の高さを誇っています。刻が明瞭で用筆も概ね鮮明ですが、筆法が分かりにくい部分もあり他の漢隸などを参照にして理解する必要があります。

「西・里・南」いずれも左右整齐でバランスの取れた結体です。しかし完全な左右対称ではなく、線の方向性や強弱などに微妙な変化があります。

「流」サンズイに不と同様な結体で書かれています。史晨碑の約二十年前に造営された石門頌なども同じように不で作られています。

「外」右側は水のように二画とした結体ですが、西狭頌や北魏の墓誌銘などにも見られます。中央の縦画から右方向に撥ね上げる線も西狭頌と同様です。左右にそれぞれ照応する画をつくることによってバランスを保っています。

懐抱

懐抱

象雲臨

■王羲之・蘭亭序（東晋三五三年頃）の臨書（19）

『懐抱』

懐抱とは、懐に抱きかかえることですが、言い換えれば心にある想いです。古人の書論に蔡邕が述べた言葉として「書は散なり。書せんと欲すれば、先ず懐抱を散じ、情に任せ性を恣（ほし）のままにし、然る後に之を書す。」とあります。訳すると「書は散である。書こうとおもったら、懐に抱いていること発散し、性情に任せられるようにして、それから書きなさい。」ということです。

空海も著書「性霊集」で「書は散なり、ただ結裏（けつり）を以て能と為すに非ず。必ず須く心を境物に遊ばしめ、懐抱を散逸し、法を四時に取り、形を万類に象るべし。」と書いています。要約すると「書は散である。字形がまとまればよいというのではなく、心を外界の物に遊ばせ、心の内にある想いを解き放ち、書法を季節の運行の秩序に取り、字形は万物の形に取るようにしなければなりません。」ということなのです。

この蘭亭序は、まさに「書は散なり」の代表的な古典で、流觴曲水の一日の遊興の想いを、心に抱く感情の趣くまま自由自在に書いています。臨書を通じて蘭亭序が神韻と称される所以を探っていききたいものです。